

第3回高知県社会教育委員会 会議概要

令和6年2月20日(火) 14:00~16:00
高知県立塩見記念青少年プラザ 3F 会議室
出席委員 (川上確也、久寿久美子、三谷七香、
岩井拓史、徳増千里、佐竹真紀
眞鍋大輔、森岡千晴、吉田友一
斉藤雅洋、松田弥花)

1 開会 (14:00~14:05)

(委員長)

前回(12月25日)の第2回委員会でご了承いただいたとおり、今回より『これからの社会教育と若者世代』のテーマのもと、これからの若者の教育や活躍の在り方について各委員より提言をいただき、協議を進めていく。

本日は、その第1弾として「どのような若者に育んでいくのか?」という目指す若者の姿やそのための教育の在り方について、三人の委員より、日頃、考えていることや取り組まれていること等をお話いただき、それを踏まえて協議を行う。忌憚のないご意見、活発な質疑をお願いします。

2 議事 (14:05~16:05)

【私の提言】

(委員1)

「どのような若者に育んでいくか」とは、学校現場からの目線では「どのような大人になってほしいか」ということになるのではないかと思います。また、「若者にどんな環境(活躍の場・機会)があるとよいか」とは、学校や地域が若者の活躍の場や機会だったらどうなるかというところに焦点を当てて話したいと思う。地域と保護者の役割については、どちらかという地域や保護者が何か支援をして若者を支えるというイメージで普通はとると思うが、そうは思っていない。地域と保護者は、自分の志を見せる、後ろ姿を見て学んでくれというのが本来の姿なのではないかと考える。つまり、若者は支援される対象ではなく、むしろ支援する側であり、それが志につながればよいというように捉えている。

本校の特徴を紹介する。

本校のある地区は自然が豊かである。この自然を活かした体験活動あるいは地域の方の支えで行う体験活動に取り組んでいる。県立農業高等学校へ行ったり、お米づくり、近くの山で間伐や伐倒作業を見たり、実際に行う林業体験、そして、正寿釜という焼き物体験などを行っている。これだけなら田舎の学校ならよくやっていること。そこで、学校の魅力化を図るため、『言葉の力を育てる』というテーマで、読む・書く・話すの技能を高めていく研究に焦点を当てて進めている。加えて、海外の小学校(イギリス・スコットランド)とのビデオレターを使つての交流、令和6年度より1・2年生の生活科の中に外国語活動を取り入れる(年間15時間)というのが特長である。これらは、子どもたちがタブレットを使い、ビデオ撮りをしたり編集したりして、海外に送るといった道具としてICTを活用している。学校教育目標は『新しい時代を拓き、心豊かでたくましい子どもの育成』である。

目指す若者の姿とは、志を持った若者である。千葉大学の宇佐美名誉教授の言葉「自分とは志である。志が無いと自分がわからない。力が出ない。自分の言動の基準が定まらない。

自分を律することが出来ない。努力ができない。自分がどこへ行くのかが分からない。」たぶん、志がない若者は日々つまらない。刹那的に生きている。ゲームで楽しむとか。「志を立てさせることが、教育というものの中核的課題である。」とも宇佐美氏は言っている。では、何を具体的にするのか。「他者の生き方を年少の学生が日常的に見聞きして知る範囲はかなり狭い。」自分の生きている範囲は狭い。本町をとっても顔見知りしかいない。その人たちが志を持っていることも確かではある。しかし、世界にはもっとすごい人がある。「本をおおいに読まなければならない。本を読むことによって、「自分もそのように生きたとしたら…」という間接経験をさせるべきである。」この間接的体験とは、今どこに居てもできる。本でもネットでも情報としてとることはできる。なぜ、本なのか。「国家の品格」を書かれた藤原正彦氏は、「本屋を守れ 読書とは国力」の中で、「初等教育の目的はただ一つ、自ら本に手を伸ばす子供を育てることしかない。」と言っている。まさに文科省が言う自主的・自発的、自分から手を伸ばす、これさえできれば、基礎的な学力はつく。同じく藤原正彦氏は、同書の中で「読書は過去も現在もこれからも、深い知識、なかならず教養を獲得するためのほとんど唯一の手段である。世は IT 時代で、インターネットを過大評価する向きも多いが、インターネットで深い知識が得られることはありえない。インターネットは切れ切れの情報、本で言えば、題名や目次や索引を見せる程度のものである。ビジネスには必要としても、教養とは無関係のものである。」「読書は教養の土台だが、教養は大局観の土台である。」つまり、これから10年、20年、50年を見据えてどうなっていくべきか。大局観は読書で養われる。「文学、芸術、歴史、思想、科学といった実用に役立つ教養なくして、健全な大局観を持つのは至難である。大局観は日常の処理判断にはさして有用ではないが、これなくしては長期的視野や国家戦略は得られない。」「国語力を向上させ、子どもたちを読書に向かわせることができるかどうか、日本の再生はかかっていると見えよう。」と言っている。最近の学生は本を読まない。分かっているつもりで話すと分かっていない、話が通じていないと嘆いているという文章も多い。

ということで、本校では、意図的に本に触れる機会を増やしている。例えば、

- ・子どもたちが子どもたちに読み聞かせをする時間
- ・図書委員会の企画で図書室を利用して辞書調べ
- ・集会で私が話したことに関連する本や実物の掲示
- ・新しい購入図書の掲示
- ・読み聞かせボランティア（教員OB）による読み聞かせ（地域学校協働活動の一環）
- ・図書バスの利用

などを行っている。

本町には、こういった取組をバックアップする機能がある。町立図書館の司書さんが月1回来校し、図書の新旧入れ替えをしたり、おすすめ本等を先生方にアドバイスをしたりしている。プロの司書が支援してくれている。かつては県からも財政的支援があった。こういった取組を施策につなげるため、提言に入れるのはどうか。幼・小・中・高・大の若者が多く参加するイベントを企画するのも一つのアイデアだろう。

若者の志に触れる体験活動という視点で取り組んでいる活動を紹介する。

- ・高知県立農業大学校学生との野菜収穫体験
- ・高知大学ウミガメサークル『かめイズム』との環境学習…実際にウミガメに触れる
- ・高知工科大学『Space. Lab』によるミニプラネタリウム学習…宇宙・科学体験
- ・高知大学地域協働学部による森林環境学習…林業体験

これらは、支援する側になって生まれる志がヒントになっている。これを支える行政の仕組みがあれば面白いと思う。

他にも若者と交流している取組を紹介する。

- ・県立の消防学校、消防署見学
- ・中学生による職業体験学習受け入れ
- ・米づくり体験…田おこし：代掻きを自分たちの手足でやってみる。トラクターは中学生が運転、保護者、地域の方も協力、田植え、稲刈り、脱穀体験
- ・宿泊体験
- ・着衣水泳体験（消防隊員協力）
- ・ブドウ農園見学
- ・最終処分場、スーパーソル工場見学
- ・牧野植物園見学
- ・ショウガ農家による出前授業
- ・技能実習生（東ティモールの青年）との交流
- ・PTAによる防災参観日（炊き出し体験、避難所運営）
- ・芋掘り体験（全校）
- ・川の水質調査（4年生）
- ・観劇教室
- ・高知食糧による出前授業
- ・消防組合による消防車見学
- ・文化芸術鑑賞、ワークショップ、公演、体験（法村友井バレエ団・オーケストラ）
- ・山の日先生事業…木工体験
- ・正寿窯、陶芸（焼き物）体験
- ・薔薇園見学
- ・折り紙教室
- ・手すき和紙づくり
- ・おらんくのサマーセミナー（町の中心市街地活性化協議会主催）…地域の事業に学校が関与し、地域活性化につなげる など

このような取組に行政が関わり、実践交流会で発表していくというのも一つのアイデアではないか。

(委員 2)

私は、高等学校に地域学校協働活動推進員として務めている。主に総合的な探究の時間に関わっている。本校の探究学習は、生徒自身の興味関心に基づいて主体的かつ自立的な活動を行い、問題発見→課題仮説の設定→課題検証→振り返りという流れで進んでいる。年間 30 時間程度 (週 1 回)、各学年で取り組んでいる。育てたい力は、活用応用能力、地域課題解決スキル、言語運用能力 (コミュニケーション力) である。学校には、三つの精神 (生徒の主体性・地域創造・多文化協働) が掲げられている。この中で先生方と一緒に授業作成、授業サポート、外部調整 (地域の方との調整役) を行っている。

今回は、県内の高校の事例の一つとして聞いてほしい。

事例①『教員の多忙さ』

先生方には、ホーム運営、教科の業務、分掌の業務、部活動指導、その他諸々に加えて生徒対応という業務がある。探究学習は、分掌の中では総務連携部に位置し、現状として、1、2 年生はホーム主任が担当、通知表での評価がない分、毎回の授業をしっかりとしていかななくてはならない。よく「探究」への理解が難しいと聞く。教科書がなく、教師自身が経験していない。成長の見える化が必要 (成長の度合いがそれぞれ違い、この授業で、生徒が成長していけるのか不安であり、それを計れない) ということを知る。

事例②「指導の難しさ (探究)」

探究の時間は、担当教員と推進員が連携をとりながら行っているが、学年団で進めるという方針があり、学年団で検討・共有を行っている。

先生方からは、探究を進めていく中で、「どのようにアドバイスしたらいいのかわからない」と聞く。先生方は、高知市や南国市に住んでおり、地域のことを知らない。異動もあり、継続したつながりが難しい。また、手法的な部分では、正解のない問いに答えを出していかななくてはならない。どのように行っていけばよいのか、生徒に下ろせばいいのか。単純なアドバイスはできるが、専門家でもなく積極的になれないという声を聞くことがある。教員の力量差が見られ、地域産品の商品開発等どこでもやられているような活動になっている。安易な解決策になってしまうということがある。

また、学年団で進めるという方針はあるものの、担当教員に負担がかかってしまう。2 年生になると地域の問題解決にそれぞれが取り組むことになり、生徒一人一人の動きの情報収集が難しい、情報共有の時間もとれない。掲示板で流すが、共有としては不十分、よって協力が得られないという課題がある。なので時間を要する会が必要だが、時間がない。先生方には、探究という授業の大切さや社会教育への深い理解、そういった面への意識がないと積極的に参加できないということになるのではないかと思う。

事例③『地域の協力体制』

これは、地域の役割に関わることである。本校では、地域協働コンソーシアムを創っている。趣旨は、探究学習を進めていく上で地域でのサポート体制を整え、強化する。そして、その体制を持続可能なものにしていく。地域に触れる教育をしていることで、将来、地域の力になってくれる生徒を育成するというものである。役場、教育委員会、観光協会、商工会、森林組合、JA、学校運営協議会、社会福祉協議会、9カ所ある集落活動センター

の方々に構成され、年に一回、互いの情報の共有を主として会を行っている。フィールドワークや出前授業などで協力をいただいているが、授業時間は限られており、情報の共有、普段の関係づくり、体制づくりは大切なところである。令和5年度は教員も参加し、地域を知るという主旨でワークショップを行った。

以上が学校現場の現状である。

その中で目指す若者の姿とは、まずは、自身の興味関心を大切にしてもらいたいと思う。探究では、与えられたテーマではなく、自分の興味関心から出発してもらいたいところを大切にしている。福祉分野や観光、自然、地域活性化まちづくりなど自分が興味が湧いたものに取り組むというところが大事なことだと思う。また、この探究の授業では、コミュニケーション力、協働力、行動力といった人間力をのばしてほしいと思っている。社会に出たときには人間力は重要となる。

大人の社会では、課題は自分で見つける、目的は自ら確認する。チームメンバーと協働して考えることが多くなる。その答えは一つではなく、最適解を考え、PDCAを回しながら見定めなければいけない。鉛筆と消しゴムがあればできる学校教育と違い、使えるものは何でも使う、分からないことは教えてもらえるものではなく、自分でアドバイスをもらえる人を考え、自分から探しに行く、もしくは、自分で答えやアイデアを導き出していかなければならない。

また、地元に戻ってきてもらいたいとか、地元の力に高校生の時からなってもらいたいと聞くことがあるが、そうなるのは地域の魅力が分かった時であると考えている。一つは、もともと地元が好きという子どももいるが、そうでない子どももいる。探究の授業も「地域のために何かしたい」という子どももいるが、「地域って何？まずは自分やろー」という子どももいる。私も高校生の頃は、地域のことはあまり考えていなかった。むしろ知らなかった。

もう一つ、比較対象を知って初めて地域の魅力が分かるということがあると思う。本校の子どもたちはずっと地元、地域にいて、地域の魅力を分かりにくい環境下にあるのではないかとも思う。進学や就職のタイミングで違う地域に触れることで自分たちの地域の良さや魅力が分かるのではないかと思っている。探究の時間では、異なる地域に触れることが大事だと考えている。また、自分たちの考えや取組を言語化して他の高校生に伝えるという活動を行うことが大事だと考えている。

(委員3)

市町村教育委員会は、地域社会の現状を見て、何をどうしていかなくてはいけないかということを常に考え、行動している。

今回は、「これからこの地域をどう支えるか」「これから先、若い子どもたちがどう地域に関わっていくか」という2点を話させていただく。

『どんな若者を育てていくか』をテーマに話すのが、若者が地域のために犠牲にならなくてはいけないというような義務感ではなく、市町村としては、地域社会を見て自分たちが心を込めて動くという人を作りたいと考えている。

目標としては、ふるさとを愛し、ふるさとを大切にしようとする若者を育てたいと考えている。地域の課題としては、全国的に少子高齢化に伴い、地域の後継者がいないということがある。これまで実施していた活動が低下している、消滅した行事もある。このままではいけない。やはり、自分の生まれた場所を大切にしてもらいたい。そこで、地域をどう守っていくのか。伝統行事をどうつないでいくのか。伝統文化をどう引き継ぐのかということ若者が考え、行ってもらいたい。それが無理なく子どもたちが成長するにつれ、そこに気持ちがいくなるような形になってほしいと思っている。

地域再生に向けて地域全体で活力のある地域づくりをするために若者がどう参画するのかということに関して、今、実践していることを2つ紹介する。

実践①（地域の応援隊として）の手立てとして若者の団体をつくる

今、若者が地域の行事に関心がないということが多いが、今のままでは、地域の行事は薄れていく。そこで若者の団体をつくりたい。それをいうと、年配の方は、昔の青年活動を思い出す。しかし、今の若者の意識では、地域の応援隊として仲間ということになることから、この取組を実施することとした。

取り組み始めて2～3年になる。県青年団にはお世話になり、何度も来町いただいている。町としては、若者に参加できる行事から参加して、一人ひとりに楽しみを味わってもらいながら、自分たちで行事をつないでいく人に育ててもらいたいと思っている。図書館まつりやクリスマスイベントなどたくさん行事を企画し、できるだけ参加してもらおう。その中で、「これって面白い」という気持ちを育みたいと思っている、その中に何回か続いて参加している方がいる。その人に声をかけ、次に何がしたいか考えてもらう。いわゆる探究である。町の行事から県青年団のイベントへも参加してもらい、小さい考えに終わらせず県の考えにも触れさせることで、自分の意識を向上させることを狙っている。その中で成功しているのが、『二十歳を祝う会』である。これは、実行委員会が5月頃から立ち上がり、年間6回以上、会を行い、本番を迎える。実行委員（12～13名）には高知市や須崎市に住んでいる者もいるが、式も催しもすべて自分たちで行っている。案内状も実行委員から来る。こうした成功体験が自信につながっている。こういった地域を活性化する若者を創るというのが1番の狙いである。自分たちがやってみたいことを考え、実行するということが大事だと考えている。

教育委員会としては、目標があるのだが、表には出さず、そこへ持っていくようにバックアップしている。また、何でもやりたいことをやらせるだけではなく、地域を見て感じたことや若者の活動で感動したことなどを若者に知らせるようにしている。そうしながら『地域の応援隊』としての趣旨を悟ってもらうようにしている。少しずつではあるが、若者の団体で交流会や座談会を実施するなど町を愛したり、町のために自分たちができることをやろうというところに目が向き出した。

実践②これからの社会を歩む児童生徒にふるさと愛を育てていく

これは、幼児教育から義務教育修了まで意図的、計画的に行っている。

○授業を通して寛容な心の育成

本町では、平成24年ごろから始まった県の地域連携道徳推進事業を大事にしなが

ら、道徳の授業について地域が一体となって取り組んでいる。10年前からは、『道徳推進フォーラム』という、一日中、道徳フォーラムができる日ができた。幼稚園から小中学校、地域全体を巻き込んで行っている。このときには司会や運営などすべて子どもが行っている。こういった取組を通して子どもたちの心の育成を図っている。

○生活・総合的な学習を通して地域を知る

本町では、探究の授業の本質を各学校が連携して追究するようにしている。

幼児教育では、お散歩の際には、地域の方に会えば挨拶をし、「〇〇さんとこのおばちゃんやね。」と言い、花を見れば「きれいな花だね。〇〇の畑にもあったね。」といった言語活動を大切にしながら、保育士が「この町は、素敵だね。きれいだね。楽しいね。」と勧める。

小学校の生活科では、子どもたちが ICT を活用し、撮った画像のものがどこにあったのか伝え合い、総合的な学習時間には、要請があれば町の学芸員が入る体制を整えている。幼稚園からつながっている古式神楽の祭りに行けば、あのリズムが幼稚園の子どもは好きで、100均のおもちゃで真似して遊ぶ。小学生は、自分たちでお神楽を再現したいという。それならば自分たちで頼んでみる。地域は喜んで協力する。今では、衣装も小学生バージョンが一式できている。子どもたちは嬉しくて、神祭シーズンには心がうずいている。

中学生になると、舞を覚えるという総合的な学習ではなく、舞の手には何が隠されているのか、この舞が踊られていた1000年前には何があったのかということを追究している。この追究をすることで、子どもたちに向上心が育っていることは確かなことであり、地域が育っていると感じている。

○社会科の探究学習から地域を知る

ここにも学芸員が入るようにしている。地域の歴史や文化を一緒に回りながら話すことにより深い学びができるようになった。「ここにお城があったのか」「この溝はどうしてあるのか」「攻めてこられないようにあるのか」などと学ぶことによって、地域の歴史を深掘りする子どもが多くなっている。他にも、「この町をきれいにしたい」という思いから、鉛筆のベンチを作るという取組になり、それが地域に伝わり、地域の方が桜の木を植えるという取組に発展した。これで終わりではなく、次に何をしようかと探究を進めているところである。このように次から次への地域の良さを発掘し、地域をよくするという取組ができている。

○地域行事に参加することから意識改革

各地域で神楽が行われることから中学生は割り振りが大変である。しかし、その地域で舞うことで、拍手をもらえ、地域の方に喜んでもらえる。こんなに大事にしているんだと身にしみて感じることができる。これが町が求めている子どもが心で感じるというものである

こういった取組により学んだ町の良さを町内外に発信するということにつなげている。町長や町の管理職の前で提言をプレゼンすることによって、予算化につながりつつある

ものもある。これが、子どもたちが自分たちのふるさとを愛することにつながっている。また、町のパンフレットを作成し、町内外へPRしている。修学旅行では、関西方面、大阪、奈良へ行き、パンフレットを使って本町の良さをPRしている。来年は、英語でやろうと計画している。そして、修学旅行では他府県との違いを知り、なぜ本町にはないのか、なぜできないのかと意識改革につながり、町に対する思いが増していると感じている。

伝統文化の継承を通して心で良さを知るということで取り組んでいる神楽であるが、先日、教育センターで中山間地域の発表があった。それに当たっては、地域は前日に会場を下見し、道具を置く場所を決めてきたり、子どもたちは出番の数秒前まで舞をチェックする。子どもたちが必死になっている姿があった。発表が終わった後、教室に帰ってくると目の色が変わっていた。地域とかかわることで地域に対する思いを心で感じ、次へ次へと進みたがっている。子どもたちの自尊感情の育成にもつながっている。また、これからの本町はどうしていくのか、自分たちがどうしていかなくてはいけないか、今、探り育っているところである。

【意見交換】

委員1の発表について

(委員)

これだけ地域と関わる体験活動を行うのに、外部との調整や予算確保等はどのようにしているのか。(プロジェクトチームのようなものがあるのか)

また、学校はカリキュラム外の活動などを入れることは難しいと聞くが、その辺りの調整はどのようにしているのか。

(委員1)

2名の地域コーディネーターが地域の人材などの広い人脈を持っており、予算面についても提案・進言をしてもらっている。また、私自身が勤務した経験から、いろいろな団体や活用できる事業などの知識があった。

管理職のやる気も重要である。教員の業務負担を増やさないと授業を必ず確保するため、様々な体験活動等を行うときには管理職と2名の地域コーディネーターが調整や準備などをすべて行っている。

これらの体験活動は、総合的な学習の時間など、カリキュラムの中に入れ込んでいる。そうすることで、担任が変わっても最低限の事ができる。大事なのは、子どもたちに主体性を持たすため、前年踏襲にしないことである。ゼロベースで考えて、子どもたちが何をしたいのか考え、学校はどこまでだったらできるのか、というところで調整を行う。

(委員)

総合的な学習の時間だけで行っているのか。また全校児童は何人か。

(委員1)

総合的な学習の時間だけでは足りないなので、他の教科としてカウントしたり(例えば田植えであれば小学校5年生の社会科、など)、学級活動などで行ったりしている。(特例校では

なく、通常の学習指導要領の中での実施)

全校児童は50人。小規模校だからフットワークも軽く動けるし、全員が体験できる。

(委員)

読書活動や図書館教育もカリキュラムの中で行っているのか。

(委員1)

カリキュラム外の業間の時間を活用している。1時間目の授業が始まる前の時間で運動、その後に読書、また昼休みから5時間目までの間で各教科の補充学習をする。発表の中にあつたプラネタリウムはこの時間で行い、授業はカットしていない。

また、地域の有志の方から毎年本の寄贈をいただいております、そのときの選書や図書室への配置などを町立図書館の司書にしてもらっている。

(委員)

発表の中に「志」というキーワードがあつたが、この言葉をどう捉えたら良いか。(将来の夢のようなことか)

(委員1)

協議の柱である「どのような若者を育てていくか」について、志を持った若者であると考えられる。それは、どう生きるべきかという問いで、恐らく答えはないがそれを探っていく過程が若者に求められていると考える。

深い知識や教養が土台となり、物事の大局が見えるようになる。大局観がないと、狭い視野になってしまい、どう生きるべきかが分からなくなる。それを追い求めることが、今必要なのだと考える。

委員2の発表について

(委員)

若い先生方が地域とつながる上での苦労や地域と関わっていく余裕があるのかなど学校現場の声や実情についてももう少し詳しく聞きたい。

(委員2)

若い先生方が地域と関わりが持ちづらいということはない。時間がないことや実際にその地域に住んでいるかどうか、地域との関わりやすさに影響していると思う。また、学校は決められたスケジュールの中で動いているため、地域からの急な提案や要望等に対して、柔軟な対応が難しい。学校に対しての要望等も、地域の人を知らないために一部の方の意見を全て真に受けてしまい大変になるケースもある。そのため、地域コーディネーターがつなぎ役として間に入ることで成り立っている。

(委員)

町村を越えた中高の連携体制などはあるのか。

(委員2)

町村によって本校への進学の数も差があり、その中では2町が施策等で力を入れてくれている。また、中高一貫校なので、中学校との連携体制はある。

(委員)

総合的な探究の時間の具体的な成果について聞きたい。また、総合的な探究の時間の指導の難しさ等もある中でどのように推進していくのか。

(委員 2)

高校で総合的な探究の時間が導入されてからまだ3年目。先生方もその学校にあった形式、手法などを手探りでやっている部分もある。進めていかないといけないという状況にある。

本校生徒がマイプロジェクトアワード（全国の探究学習・マイプロジェクトを実行した高校生たちの活動の発表や交流のイベント）に参加し、「地元の旧商店街に空き家が多くなった」という母親との会話から、賑わいを取り戻すために行った空き家を活用したチャレンジショップについての取組を発表した。その他には、地域の特産品の認知度を上げるための商品開発や販売、情報発信の工夫などの取組があった。

(委員)

発表の中にあつた「人間力」という言葉について、もう少し具体的に聞きたい。「人間力」の言葉の具体像が固まり過ぎてしまうと、そこに子どもたちを当てはめてしまうことにも繋がると思うが。

(委員 2)

探究の授業で獲得したい力であると考えており、今回の発表ではコミュニケーション力、協働力、行動力を主に挙げた。

コミュニケーション力については、話が上手だとコミュニケーション力が高いと思われがちだが、それ以外にも多様なコミュニケーションの力があり、それを地域と関わる中で身につけて欲しいと思っている。協働力は、生徒同士に限らず、地域の方など外部の大人とも協働する力、また行動力は、自分たちで計画を立て、それを実行していく力だと考えている。

学力だけではなく、社会に出て役立つ力が人間力であり、その人間力が高い若者に育てて欲しいと考える。

委員 3 の発表について

(委員)

町全体で統一した取組をしていくことは難しい事だと思うが、その上でどのように学校や先生方との連携を取られているのか。

(委員 3)

町全体で取り組んでいくため、各学校長の意識改革、風土づくりをしていったことで、教育委員会主導ではない自主的な学校長同士の組織（ロスカプロジェクト）が立ち上がった。学力調査の結果を受けての取組や地域の伝統文化など、各学校同士が自ら連携を行っている。

(委員)

町の盛り上がり度合いは目に見えにくいと思うが、何を持って評価し、取組につなげているのか。

(委員 3)

目に見える成果として、最近町への若い方の移住が多い。幼稚園の園児も増えたため、施

設の増設を計画している程である。

人口を増やす施策に取り組む上での教育委員会の役割として、教育で特色を出し、子育て世代にとって魅力ある町にしていくことが大事であると考えている。

(委員)

教育計画と町づくりがどのように繋がっているのか。

(委員3)

本町には高校がないので、中学校を卒業したら町外の学校へ入学する。その高校生たちが夏休みには、町内のプール監視や子ども教室のアルバイトをすることが多く、地域に育てられた側から逆に育てる側になり、地域の子どもたちに愛着を持てる環境がある。

また、町の産業祭や文化祭の中で、子どもたちが探究や総合の授業で取り組んだことを発表を行っている。子どもたちの自信につながり、また地域にとっても、地域の伝統文化を守り広めていこうというモチベーションにつながっている。このような教育が生きて働くという点に町として重点を置いている。

(委員)

委員1、委員3に聞く。地域コーディネーターや学校の校長など、数年ごとにメンバーが変わっていく中で、活動の継続性をどのように担保しているのか。

(委員1)

現在のコーディネーター2名は退任予定で、現在新しい方を探している。業務の引き継ぎに関しては、校長、教頭、コーディネーター2名の4名体制で引き継いでいくことを考えている。4名全員が同時に変わった場合は、勤務年数が長い職員に引き継ぐよう考えている。

(委員)

コーディネーターの任用は学校長に権限があるのか。

(委員1)

学校長には人事の権限はない。ただし、コーディネーターを引き受けてもらう人は学校で探している。例えば、学校・PTAのOBの方など、長く地域で暮らしている方など。

(委員3)

学校長の自主的な組織ができた背景には、継続性を保つためという目的があった。組織があることで、自分たちで自主的に動くことができ、メンバーが変わっても教育が変わることはない。

(委員)

委員2の発表の中でめざす若者像として「自分の興味・関心から出発する」とあったが、そもそも自分が何に興味・関心があるのかが分からないという生徒も多いと思う。どのように発掘しているのか。

(委員2)

本校では、2年生から自分の興味・関心に基づいてテーマ設定していくカリキュラムとなっている。1年生では地域を知ることからスタートし、地域の方の話や役場の方からの話を聞くことなどを行う。それらを通じて2年生までに興味がある分野が見つけられるようにしている。

自分の興味関心がはっきりしている場合には、そのテーマが本当に町の現状と合っているかの情報収集をし、興味関心と結び付けて探究をしていく。

興味関心がはっきりしていない場合には、地域の現状を知った上で地域の困りごとからテーマ設定をしていく。

(委員)

自分たち(大人)がどんな姿をお手本として若い方に見せているか、自分たちの地域に愛情を持っているか、自信を持っているか、というところが大事だと考える。地域の魅力的な大人、高齢者の方にスポットを当てていくことで、子どもたちや若者が「こんな大人になりたい」と感じ、心を動かすことができるのではないかと。

(委員)

今日発表されたような取組が、例えば社会教育の活動が活発でない地域や都市部、また児童・生徒数の多い学校でも同じようにできるのか(どのようにしていくのか)というところが課題であると感じた。

【その他】

今回は、3月11日(月)に行う。

3 閉会(15:55~16:00)

生涯学習課長挨拶